写真：浅間台付近からみなとみらい地区をのぞむ

特集　横浜と映画

――映像に記録された横浜――

横浜が映し出された映像にはどのようなものがあるのでしょうか。今回は、横浜市中央図書館で所蔵している、横浜を扱った映画（ビデオやレーザーディスク）など、映像資料の一部を紹介します（太字は、2003年12月現在所蔵している資料です。中央図書館内でご覧いただくことができます）。

これもまた、横浜

まずは映画から。

天国と地獄（1963年　黒沢プロダクション／東宝）
監督・脚本：黒澤明　脚本：小国英雄　菊島隆三　久板栄二郎　撮影：中井朝一　斎藤孝雄　出演：三船敏郎　仲代達矢　山崎努　ほか

誘拐を題材とした映画としては先駆的であるこの作品は、エド・マクベインの『キングの身代金』を原作としています。製靴会社の重役が、社内の権力闘争で勝負をかけたその時に、自分の息子と間違えられて運転手の息子が誘拐され、その上身代金を要求されて苦悩する――その設定は原作のままに、舞台を横浜に移し、犯人や警部らの人物造形、独自の場面設定など、原作とはまた違った趣向で作品世界を作り上げています。

身代金を要求される主人公は、横浜駅からほど近い浅間台の、横浜港を一望できる邸宅に住み、一方犯人はその高台を見上げて暮らし、犯行に及ぶ。犯人の目を欺くため、捜査員たちは地元デパートの配送車に乗り、配達員のいでたちであらわれ、捜査陣は犯人を泳がせて、伊勢佐木町、黄金町を追跡。また、新幹線開通以前の、東海道線特急「こだま」を使った身代金のやりとり、江ノ電の走行音など――横浜にとどまらず、神奈川ならでは、という道具立てがそろっています。また、強い印象を残す黄金町界隈の場面も、いわゆる観光地としての横浜とは違う部分を取り上げたもので異彩を放っています。

なお、黒澤監督のデビュー作である『**姿三四郎**』(1943年）は、浅間台近くの浅間神社でクランク・インしており、浅間神社は世界のクロサワの出発点ということになります。20年を経て再び撮影した浅間台周辺は、黒澤作品と縁浅からぬ地といってもよいでしょう。ロケセットをつくった浅間台周辺等を実際に見上げると、現在では住宅などが増えて、当時とは大きく景観が変わっています。

失われてしまう景色への想い

『天国と地獄』では、自分を見下すかのような立地に、登場人物が屈折した視線を投げかけていた高台の家。しかし、憧憬のまなざしをもって見上げられることもあります。

喜劇・家族同盟（1983年　松竹）
監督・脚本：前田陽一　脚本：中島丈博　撮影：長沼六男　出演：中村雅俊　有島一郎　ミヤコ蝶々　ほか

空襲で妻子を失っていた男が、年老いて大金を手にする。そこで、失った息子の姿に重なり合う港湾労働者の若者をはじめとして、家族のかわりになる他人を集めて、夢見ていた高台の家で、家族ごっこを始めるが――。風変わりな設定ながらも、中村川流域の下町情緒あふれる界隈と山手周辺を舞台に、しみじみと味わい深い喜劇が展開します。

現在、中村川の上には高架がかかり、高速道路が走っていますが、作品中には、まだ高架のかかっていない川の流れが、幾度となく映し出されます。長年横浜に暮らしたという監督の、高速道路建設により景観が変わることが決まっていた中村川への、そして横浜への想いが込められているようです。

現在の中村川

破壊される名誉？

現在はどうでしょう。依然として、地形そのものがさまざまな感情を呼び起こすことはあるにしても、今はむしろ人工物である高層建築物のほうが際立っているのではないでしょうか。

ゴジラＶＳモスラ（1992年　東宝）
監督：大河原孝夫　特撮技術監督：川北紘一　脚本：大森一樹　撮影：岸本正広　出演：別所哲也　小林聡美　宝田明　ほか

「ゴジラ」シリーズ第19作では、モスラと黒いモスラ・バトラ、そして蘇ったゴジラが死闘を繰り広げ、ついに横浜へ。怪獣たちに破壊されるのは、もちろんみなとみらい地区……。戦闘シーンそのものはスタジオのミニチュアセットですが、作品中では実景も使われています。

特撮映画ですが、怪獣に破壊されたという点において、みなとみらい地区の全国的な認知度を高めたといえるのかもしれません。

横浜が舞台ではありませんが…

番外編としてはこんな映画もあります。

君は僕をスキになる（1989年　東宝／プルミエ・インターナショナル）
監督：渡邊孝好　脚本：野島伸司　撮影：藤沢順一
出演：山田邦子　斉藤由貴　加藤昌也　大江千里　ほか

作詞家の秋元康が企画したラブコメディー。

ストーリーの舞台自体は横浜ではありませんが、斉藤由貴演ずる登場人物の職場として、中央図書館の前身である、長い歴史のある横浜市図書館の建物を使ってロケが行なわれました。移動図書館車のはまかぜ号も登場します。公開直後は、「映画に映っている図書館を実際に見てみたくて」という人がたくさん訪れました。

記録映画は時代の雰囲気とともに

記録映画は横浜の移り変わりを伝えます。

横浜市政ダイジェスト　No.１～70（Ｓ27.4～62.9）
（神奈川ニュース映画協会）

映画館で、主題映画が上映される前に流れるニュース映画を、年代順にまとめたもの。企画は横浜市市民局広報課。横浜開港百年祭や動物園での動物の誕生など、横浜に関するニュースを、時代の雰囲気ごと伝えます。

空襲と占領を読み解く

そして最後に、掘り出し物を１つご紹介します。

終戦直後・占領下の映像記録
（エムティ出版・映像事業本部）

アメリカ国立公文書館所蔵の膨大なフィルムの中から、日本がGHQ占領下（間接統治）だった時期を検索・抽出した映像のすべてをノーカットで収載した、映像記録です。

第50巻には、昭和20年５月29日にＢ29による爆撃を受けた横浜市の被害状況の記録が収められています。完全に焼失した中華街を中心とした商店街がとらえられている一方で、焼失を免れた横浜税関や県庁ビルなどが撮影されていて、徹底的に破壊された区域と、被害を受けずに残された区画のあることがわかります。

(R.T.)

中央図書館では、今回紹介した以外にも、横浜が舞台になった映画や横浜で撮影した映画、また、横浜に関する映像資料などを多数所蔵しています。図書や雑誌とあわせ、貴重な映像資料をどうぞご利用ください。

✲参考文献✲

「市民グラフヨコハマ」1984年No.48　（特集：横浜・映画名鑑～シネマ・イン・ヨコハマ）　横浜市広報センター
『かながわシネマ風土記』（かもめ文庫）丸岡澄夫／著　神奈川新聞社　1993年
『日本映画人名事典　監督篇』キネマ旬報社　1997年
『終戦直後・占領下の映像記録　全132巻　未公開秘蔵映像コンテンツリスト』藤井非三四／〔他〕編　エムティ出版　1998年
『シネマパラダイス』服部宏／著　神奈川新聞社　1998年
「「天国と地獄」から「私立探偵・濱マイク」まで――ヨコハマ映画の変遷をたどる――」鈴村たけし　服部宏（『横浜学セミナー』29　横浜と映画　はまぎん産業文化振興財団／編　横浜学連絡会議　2001年）
『ぴあシネマクラブ　日本映画編　2003－2004』ぴあ　2003年

映画パンフレット4500点！
中央図書館所蔵コレクションのご紹介

映画パンフレットは、映画鑑賞の随伴にとどまらず、その映画の価値、ひいてはその時代の文化をつたえる役割をもつ貴重な資料です。映画を愛する以上に映画パンフレットに魅力を感じている方も多いと思います。

中央図書館では、約4500点にものぼる映画パンフレットを所蔵しています。

この貴重なコレクションは、1997年の冬、市民の方から図書館に寄贈の申し入れをいただき、喜んでお受けしたものです。ダンボール数十箱に及ぶ膨大な量に圧倒され、その充実した内容に目をみはり、数度の往復で図書館に搬送してから約６年。この間寄贈者を含め関係各位にご迷惑をおかけしましたが、このほどようやく整備を終え公開の運びとなりました。

コレクションは戦後から1990年代初頭までの外国映画が８割を占めています。リバイバル上映も含めると、1920年代製作の映画から約70年間の映画の歴史をたどることができます。

注目すべきは、ひとつの映画について複数のパンフレットが収集されているものが多いこと。そして、初公開時やリバイバル上映、映画祭や企画上映、と多彩なパンフレットが見られるのも特徴です。

たとえば…『レベッカ』

アルフレッド・ヒッチコック監督の渡米第１作として知られているこの作品は、1951年に日本で初公開されました。この作品に関するパンフレットは実に６点。

日比谷映画（1951、復刻版）、テアトルSS（1952）ヒビヤみゆき座（1967）、東宝系（1982）、有楽座日比谷映画さよならフェスティバル（1984）、東宝シネ・ルネッサンス86（1986）

たとえば…『となりのトトロ』

コレクションには少数ですが日本映画も含まれています。この作品については、東宝配給（1988）と大映配給（1989）の２種類のパンフレットがあり、それらを比較することができます。

映画史に足跡を残した名作、その時代の雰囲気を濃厚に宿すＢ級映画…。あらゆるジャンルに及ぶこのコレクションを映画研究に役立てていただきたいと思います。（なお、このコレクションは散逸を防ぎ良好な状態で保存するため、書庫に保管し館内での閲覧に限って利用していただくことにしています。）　(M.W.)

オデヲン座ウィークリー
～日本映画史に残る洋画封切館のプログラム～

いまから約100年前の明治40年前後に、横浜でもさまざまな映画館が生まれました。その１つにオデヲン座があり、日本でも最も古い洋画封切館の１つとして、明治44年に営業を開始しました。

経営者が貿易商であったため、欧米の新しい映画をいち早く買い付けては、オデヲン座で上映をしました。大正９年ごろまでは、上映した作品の多くが日本で最も早く封切られたものであるといわれ、横浜ばかりではなく、東京からも新着映画を見ようと、大勢の人がオデヲン座に駆けつけていたといいます。関東大震災の後には、まだ無声映画の時代ということもあり、管弦楽団を編成して、映画の伴奏音楽とするなど他の映画館と差別化を図っていました。

現在と異なり、第二次世界大戦前は、映画館が独自にプログラムを作製し、無料で入場者に配布しているところがいくつもありました。オデヲン座では、大正末期のころから「オデヲン座ウィークリー」を創刊しています。どのような作品がいつごろ上映されていたのか、写真入りで解説や案内が述べられており、当時の映画文化の様子を知ることができます。表紙にも凝り、さまざまな画家が、横浜を題材とした表紙を描いていた時期もありました。日本の映画史を語る上で大変貴重な資料といえましょう。

中央図書館では、この「オデヲン座ウィークリー」を414号（1932年２月）から579号（1935年４月）まで合本にしたもの（欠号あり）を所蔵し、閲覧できるようにしています。この合本のほかに所蔵しているものについてもご利用いただけるよう、準備を進めています。

(H.Y.)

映像で横浜の魅力をアピール！―横浜フィルムコミッション

「あの映画の舞台になった場所に行きたい」そんな思いから旅に出かけたり、見慣れた風景を映像の中に発見して意外な魅力を見出したりしたことはありませんか？映像には人をいざなう力があり、その力は映し出された地域の文化の振興、さらに経済の活性化を促します。

映像製作者がロケーション撮影を行う場合、撮影場所の選定、撮影現場の地域や施設の管轄部署に対する許可の申請など、様々な作業が必要になります。従来は、撮影許可を得るまでに複数のセクションにわたって手続きをする必要があったため、製作者は大変煩雑な手順を踏んで撮影をしていました。

地域と映像製作者を結び、撮影の窓口となるのがフィルムコミッションです。フィルムコミッションは、ロケーション撮影の誘致を積極的に行い、情報提供や、道路・公園・各種施設などの使用許可や届出手続きの代行をするなどして、撮影作業を円滑に進めるよう支援する組織で、その多くが自治体による非営利の事業です。

アメリカには、1940年代からフィルムコミッションがあり、早くからロケーションの支援を行っていました。一方日本には、比較的最近までロケーション支援組織がなく、相対的に撮影環境が良いとはいえませんでした。そのため、関係者からはフィルムコミッションを望む声が強く、2000年２月には民間による任意の研究会が設立されました。シンポジウムも数回開催される中で設立の気運が高まり、地方自治体の間にもフィルムコミッション設立の動きが広がりました。2003年８月現在、「全国フィルム・コミッション連絡協議会」には58の団体が加盟しています。

それでは、横浜港や山手、中華街などを擁し、映像製作者の多くがベースを置く東京から比較的近く、撮影の需要が昔から多かった横浜では、どのような状況だったのでしょうか。

1990年代後半、「横浜市の手続きの取りまとめが出来ないか」という篠田正浩監督の発言や、故伊丹十三監督が「横浜の映像都市宣言を望む」と題するコラムを新聞に寄せるなどの働きかけがあり、フィルムコミッションに対する期待は高まりました。2000年３月には、『映像都市を目指して―横浜フィルムコミッションへの第一歩』と題したシンポジウムが、横浜学特別セミナー「横浜と映画」第４回として、フィルムコミッション設立を求める横浜の映画関係者を中心に開催されました。

全国的な流れに相前後する形で、2000年10月、横浜フィルムコミッションの事業がスタートしました。映画やドラマ、コマーシャル、音楽のプロモーションビデオ（ＰＶ）などの撮影に協力するため、ロケ候補地の紹介や、各機関との折衝、撮影現場のニーズにこたえられる市内企業の紹介など、多岐にわたる業務を行っています。対応実績は、2003年９月末までの３年間で合計2,200件余り、年間700件以上にのぼります。（最近のものを中心に、支援作品の一部を下の表にまとめました。）前述の「全国フィルム・コミッション連絡協議会」のほか、国際団体である「国際フィルムコミッショナーズ協会（AFCI)」にも加盟し、現在２人のスタッフがAFCI認定のフィルムコミッショナーの資格を得て活動しています。

横浜フィルムコミッションでは、今後も市からの協力とバックアップをお願いしながら、さまざまな形で≪映像製作に協力的な街≫を目指し、「横浜」をPRしていきます。

原稿作成協力：横浜フィルムコミッション
ホームページ:http://www.welcome.city.yokohama.jp/film/

横浜フィルムコミッションが支援した作品と主な撮影地（☆は横浜が舞台になっている作品）

映画	阿修羅のごとく（東宝映画）	日野公園墓地
	うつつ（日活）	仲町台駅（市営地下鉄）
	陽はまた昇る（東映）　☆	山下公園、中華街ほか
テレビ	迷路の歩き方（ＮＨＫ）　☆	市営地下鉄・市営バス
	私立探偵　濱マイク（日本テレビ／よみうりテレビ）☆	南本牧埠頭、市立大学瀬戸キャンパスほか
	ホットマン（ＴＢＳ）　☆	六角橋商店街、白幡池公園ほか
	僕の生きる道（フジテレビ）　☆	清水ヶ丘公園、赤レンガ二棟間広場ほか
	法医学教室の事件ファイル（テレビ朝日）　☆	総合保健医療センター、ぷかり桟橋ほか
ＰＶ	CHEMISTRY「My Gift to You」　☆	開港記念会館前、開港広場ほか

横浜市内地域図書館のご紹介（番外編）

1994年２月22日、横浜市中央図書館が開館しました。「十年一昔」という言葉もありますが、小欄では本誌のバックナンバーから、開館後の歩みをたどるとともに、今後の展望についても浮き彫りにしたいと思います。

図書館十年の歩みを図書館報に読む

中央図書館の開館が、単なるハードウェアの整備でないことは、21号（1994年３月）の特集「祝!! 横浜市中央図書館開館」の小見出しにうかがえます。曰く、「共通カードになりました」。曰く、「全館を一つの図書館のように使おう」。曰く、「ますます便利な予約サービス」。いずれも開館を契機に導入したオンライン=ネットワーク=システムにより実現したサービスです。物流にも配慮したシステム化の成果はめざましく、予約冊数、貸出冊数、ともに飛躍的に増えました。しかし、急増にともなう課題も多く、業務上のひずみについては、36号（1999年３月）の「統計でみる市立図書館10年のあゆみ」上で、「サービスのあり方を見直す時期」と指摘しています。

●情報管理

システム化の最大の特徴は、コンピューターによる本の検索といえるでしょう。館報を見ると、23号（1995年2月）の「「利用者用検索機」で本をさがしてみよう」を皮切りに、30号（1997年3月）では、全ページを利用した特集「検索の達人への道」を組んでいます。

こうした図書館情報システムによる検索方法のご案内のほか、34号（1998年10月）は、横浜市立図書館がホームページによるサービスを開始したことを紹介するとともに、国立国会図書館・植月献二氏による随想「インターネットと図書館」を掲載しています。また、コラム「CD-ROM閲覧サービスについて」では、新聞記事をはじめとするデータベースにふれ、さらに、37号（2000年１月）では、「中央図書館３Ｆ〈PCコーナー〉がオープンしました！」と発展していきます。情報提供機関としての図書館に欠かせない資料として、CD-ROMに代表される新しいメディアが浸透していく様子がわかります。

また、48号（2003年３月）の「横浜市立図書館のシステムが新しくなりました」によると、図書館情報システムを更新した結果、本の在庫情報までわかる、とあります。蔵書検索をはじめとした図書館のホームページは、横浜市が提供するウェブ＝サイトのなかでも、トップクラスのアクセス数を誇っています。

市民の皆さまがより一層本や情報を探しやすくなるように、館報を通じてＰＲを行うとともに、実際にコンピューターを使いながら検索を体験していただく、という試みも行っています。地域図書館での講座のほか、中央図書館では、今年度、「情報検索術の伝授」と銘打った講座「インターネットと図書資料を駆使した調べ方のコツ」を開催しました。

いずれも参加人数に限りのある事業でしたが、図書館員が日ごろのサービスを通じて培ったノウハウを市民の皆さまに還元する、ひとつの方法といえましょう。

皆さまの本を探す楽しみと、わかりやすい本の探し方の双方を目標に、図書館データベースの充実化を図るとともに、検索手法の「伝授」にも知恵と工夫を凝らしていきたいと思っています。

●本の紹介

コンピューター活用術のほか、オーソドックスなスタイルによる本の紹介も誌面で展開しています。38号（2000年３月）と39号（2000年３月）がマイクロ資料、新聞と移民資料についての紹介です。40号（2000年10月）

からは連載「参考図書のあれこれ」を開始しました。第１回が「百科事典」、その後、「人物」、「統計」、「郷土」、「翻訳書」、「地図」、「新聞記事」、「日本語」、「CD-ROM」と続きます。単なる本の羅列ではなく、体系立て、本の特徴を文章で紹介するページです。これも皆さまからのお問い合わせにより鍛えられたスタッフの経験の蓄積を編集したものです。

このような紹介記事のほか、館報では、行政の取り組みのPRも兼ねた本の紹介も行っています。たとえば、32号（1998年１月）の「能に親しもう」は、1996年６月に開館した横浜能楽堂にちなんだ特集記事、同号の連載「よこはま発アーティストボイス」は、横浜生まれの観世流能楽師田邉竹生師を迎えてのインタビューです。また、45号（2002年３月）はFIFAワールドカップ、46号（2002年10月）は横浜にぎわい座と、それぞれ横浜のトピックに関連したテーマを設定し、本の紹介もしています。

図書館では、本の紹介としての展示会も実施しています。館報では、展示会とも連動し、「翻訳絵本の読みくらべを楽しむ」（35号：1999年１月）、「《街》をつくる　みなとみらい21」（44号：2002年２月）、「元禄事件から300年～横浜と忠臣蔵～」（47号：2003年３月）、「関東大震災と横浜」（49号：2004年１月）を掲載しています。ミニ誌上展示会といえましょうか。

紙メディアである館報は、ページ数、あるいは部数などの物理的な制約がありますが、電子空間ではそのような垣根を取り払った情報発信が可能です。2003年の「関東大震災と横浜」では、初めてホームページ上に関連のコンテンツを掲載しました。

今後、本を紹介する手法は、展示会に代表される図書館内でのさまざまな工夫や、館報をはじめとする紙メディアに加え、インターネットを活用した本の紹介手続きが重みを増すことでしょう。皆さまのご利用をお待ちするだけの図書館ではなく、積極的に情報を公開し、組織化した情報を発信する図書館を目指したいと考えています。これからの図書館の指標は、「貸出冊数」ではなく、ホームページへの「アクセス件数」となるかもしれません。

●サービスのレベル＝アップ

横浜市には、「市長への手紙」に代表される広聴事業があります。このほか、中央図書館では「図書館への手紙」もいただいています。さらに、平成９年度から11年度にかけ、図書サービス調査事業を実施するなど、さまざまな手段により皆さまのご要望を伺い、サービス改善に努めています。

館報では、「図書館への手紙報告」を38号（2000年３月）以降、４回にわたって掲載しています。お寄せいただいたご意見と回答を収録したものです。改善した事柄、あるいはこのような理由でご要望に添えませんなど、できるだけ明確な回答を心がけています。

いくつかご紹介しましょう。本の予約サービスには、多数のご意見が寄せられます。「インターネット検索で在庫状況がわかるように」（38号：2000年３月）── これは前述のとおり現在では可能になりました。「インターネットで本を予約したい」（38号：2000年３月）── これについてはできるだけ早い時期に実現すべく、現在準備を進めています。「食堂がなく、不便である」（45号：2002年３月）── 2002年３月にふれあいショップがオープンしました。「1階の記載台が暗い」（48号：2003年３月）── 2002年11月に照明をつけました。

そのほか、もっともご要望が多かった開館日・開館時間の延長については、2000年４月に祝日開館、および中央図書館平日の開館時間延長を、2001年12月に月曜日の開館と改善をしました。

今後も皆さまからいただいたご意見を参考に、サービスの質の向上にも努め、横浜市の文化基盤を支える施設として、本と建物と図書館員と三位一体となって、ご満足いただけるサービス提供に努める所存です。

（J.K.）

参考図書のあれこれ（第11回）：映画を調べる

レポートを書くために映画に関する資料を集めたい、あの映画をもう一度見てみたいけどタイトルを忘れてしまった、あの映画のシナリオを読みたい・・・など、多くの方が調べ物をしに図書館を利用されています。今回は、「映画を調べる」と題しまして、これらのご質問に役立つ資料をご紹介します。

映画関係に限らず参考図書全般に言えることですが、それぞれ載っている情報の収録期間が異なりますので、ご注意ください。また最新の情報を得るためには、雑誌やインターネットの方が有用な場合もあります。いろいろな検索の方法もあわせてご紹介しますので、調査の際にお役立てください。

また中央図書館には多くの映像資料を所蔵し、館内で閲覧できる「音楽映像資料コーナー」があります。

お気に入りの映画がみつかったら、どうぞご利用ください。

映画についての本を探す

求める図書がはっきりわかっているわけではなく、あるテーマに関する資料を集めたい場合、検索機でキーワードを入れて検索してもある程度はわかります。しかし、「タイトルなどにそのキーワードが入ってはいないが、内容的にはそのテーマを扱っている図書」は検索結果として出てきません。そこで映画に関して、どのような図書が出版されているのかを調べるための参考図書をまずご紹介します。

『事典映画の図書』
辻恭平著　凱風社　1989年

国内で刊行された映画に関する和洋図書で、刊行年月日が1897（明治30）年～1985（昭和60）年のもの、約5000点を収録。著者本人が原本を直接確認して記述しているので、書誌事項の信頼性が高いと評価されています。解説、歴史、脚本論など、著者独自の分類のもとに配列されていて、書名、著者名など基本的な書誌的事項に加えて、簡単な説明があり、巻末の書名索引、シリーズ名索引、著者名索引から検索することができます。取材源が記載されているので、所蔵機関を調べるときにも役立ちます。

『映画・音楽・芸能の本全情報 45／94』
日外アソシエーツ　1997年
『映画・音楽・芸能の本全情報 95／99』
日外アソシエーツ　2000年

「○○の本全情報」という名で様々な分野の図書を網羅的に集めた図書目録シリーズのひとつで、映画、音楽、芸能に関する図書を網羅的に集めた目録です。それぞれの期間内に日本国内で刊行された商業出版物、政府刊行物、私家版などを収録していますが、写真集、絵本などは入っていません。書誌事項のほかに、最近の図書には内容も書かれています。事項名索引がついており、本文の見出し項目、その中に含まれているテーマなどから検索することができます。

たとえば「映画業界」について調べたい場合、横浜市立図書館の蔵書検索では、「映画業界」というキーワードを入れても数冊しかヒットしませんが、この参考図書で「映画産業・ビジネス」という項目を見ると、関連する多くの図書を知ることができます。このように参考図書と蔵書検索をうまく組み合わせることが資料集めのコツです。

このシリーズはまだ2000年以降のものがでていませんが、雑誌**『キネマ旬報』**の毎年２月下旬号・決算特別号に「映画関連書籍刊行リスト」があり、これが参考になるでしょう。またこの決算特別号には、前年の「キネマ旬報ベストテン」「映画界物故人」「映画祭、

映画賞一覧」など、前年１年をふりかえる記録があります。また１年分のキネマ旬報の記事を調べるための総索引がついています。

映画に関する雑誌記事を探すツールとして、明治、大正期のものに関しては**『日本映画文献書誌　明治大正期１・２・索引』**（牧野守編　雄松堂書店　2003年）がありますが、そのほかに映画に限らず雑誌記事の検索ができるデータベースがあります。

ほかにも…。

キーワードを入力するとそのキーワードを含む記事を検索できるデータベースです。

中央図書館で利用可能なCD-ROMデータベース

「国立国会図書館雑誌記事索引」

「大宅壮一文庫雑誌記事索引」

インターネット上の無料データベース

「国立国会図書館」NDL-OPAC

（蔵書検索申込システム）

http://opac.ndl.go.jp/index.html

「一般資料」「雑誌記事索引」等の検索ができます。

作品のプロフィールを調べる

「あの映画の監督って誰だったっけ」「あの映画はどんな話しだったっけ」など、ふと思い出したくなることはありませんか。ここでは、映画作品に関しての基本的なデータを調べるときに使っていただきたい図書をご紹介します。監督名や出演俳優、タイトルなどの情報と、簡単な内容を調べるツールです。

『ぴあシネマクラブ　邦画編』
『ぴあシネマクラブ　洋画編』
ぴあ　年刊

以下の観点を含め、多くの作品を収録しています。
① その時点でソフト（ビデオ、DVD）がリリースされ、セルあるいはレンタルで見ることができるもの、
② これまでに国内の主要な劇場およびホールで上映された作品で、今後も上映される可能性のあるもの、
③ 今後、テレビ各局で放映される可能性のあるもの、
④ 映画史上重要な作品および重要な監督の代表作品など。

監督、出演俳優名、タイトル、内容などが記載されており、まず最初に見たい参考図書です。毎年出版されており、物故者のリストや映画祭、映画賞についての特集があるので、前年の映画界の概況を知るためにも便利です。著名な監督、俳優、カメラマン、音楽家、原作者に関しては、巻末の索引から関わった作品を引くことができます。

ほかにも…。

インターネット上に映画データベースが公開され、電子媒体ならではの、複雑な検索が可能になっています。

『キネマ旬報全映画作品データベース』

http：//www.walkerplus.com/movie/kinejun/

1950年～2000年公開の37,000タイトル、人名150,000件を収録。タイトルの一部から、俳優名や役名から、また解説文の中のキーワードからと、多方向から検索が可能。解説、ストーリーも詳しい。

『ぴあシネマクラブ』

http：//www.pia.co.jp/cinemaclub/main.jsp

洋画10,800本、邦画6,500本を収録。タイトルと、人名（俳優、スタッフ）から検索可能。

図書の「ぴあシネマクラブ」はタイトルの50音順に配列されているので、タイトルがわかっていて調べることが前提でした。しかし、上記のデータベースを使えば、「『なんとかフィクション』だと思うんだけど、最初がわからない」とか、「タイトルの途中からしかわからない」場合でも、検索が可能です。ただ、どちらのデータベースも最新の情報は載っていないようなので、注意が必要です。

また、アニメ映画や記録映画は、参考図書等に載らないことが多いので、専門の図書にあたる必要があります。

『アニメDVD＆LD大全集　2000年度版』
メタモル出版　2000年

廃盤されたものも含めて、アニメDVD 1,383作品、

LD 5,700作品の、監督や声優のほか、詳しい内容も載っています。2000年発売のものまで。

その他、**『アニメDVDコンプリート2001』**（角川書店　2000年）など、ソフトとして発売されているアニメの目録が詳しく載っています。

記録映画に関しては**『日本ドキュメンタリー映画全史』**（野田真吉著　社会思想社　1984年）に、自主制作記録映画一覧と映画史年表など、若干の記述があります。

シナリオを探す

シナリオは出版点数そのものがとても少なく、見つけるのは難しいということに注意が必要です。一部の有名な監督や脚本家の作品は出版されている場合があり、前述した「映画についての図書をさがす参考図書」に、“シナリオ”として分類され挙げられているので、その中から探すことができます。しかし、図書として出版されていなくても、**『シナリオ』**（シナリオ作家協会）などの雑誌に収録されている場合もあるので、合わせて見てみるとよいでしょう。また、「○○シナリオ集」といった、いくつものシナリオを収録した図書だと、タイトルだけではどんなシナリオが収録されているのかわからないことがあります。そんなときに使える参考図書もあります。

『シナリオ文献　増補改訂版』
谷川義雄編　風涛社　1997年

1990年までに発行された、雑誌と単行本に採録されたシナリオを収録しています。巻末の索引でシナリオの題名から引くことができ、どの資料に収録されているかがわかります。戦前のものは別にリストになって載っているだけですが、索引に含まれているので便利です。

『戯曲・シナリオ集　内容綜覧』
日外アソシエーツ　2002年

1946（昭和21）年～2001（平成13）年までに、国内で刊行された戯曲集とシナリオ集の内容が記載されています。その逆に、巻末の作家名索引、作品名索引を使えば、求めるシナリオがどの本に含まれているかを調べることができます。

以上の参考図書でみつかるのはおもに日本映画のシナリオです。外国映画はシナリオとしての刊行はほとんどありません。ただし有名な映画に関しては、英語学習用教材として出版されているシリーズのなかにある場合があります。

『スクリーンプレイシリーズ』
スクリーンプレイ出版

映画のセリフとト書き（シーンの説明）を英語および日本語で文字化したもので、おもに英会話学習に利用されていますが、読み物としても利用できます。

ほかにも…。

シナリオなど、映画に関する資料を集めた専門図書館をご紹介します。利用資格、利用方法については、あらかじめお問い合わせください。

松竹大谷図書館
東京都中央区築地1-13-1　松竹スクエア３階
03-5550-1694
演劇、映画、日本舞踊、TV等に関する資料を所蔵。

東京国立近代美術館フィルムセンター・図書室
東京都中央区京橋3-7-6
03-3561-0830
図書検索 http://www.momat.go.jp/opac.html

実際に作品を見たい

現在公開中の映画を見るためには、最新の情報が必要です。このような場合、図書で探すよりは、情報誌やインターネットで調べる必要があります。

最新情報について調べる時に…。
情報誌…『ぴあ』『Tokyo Walker』
『Yokohama Walker』
映画雑誌…『キネマ旬報』
インターネット…Yahoo!ムービー
http://movies.yahoo.co.jp/

古い映画を見たい場合、ビデオやＣＤで発売されているのかを調べる図書があります。

『ビデオソフト総カタログ』CDジャーナル別冊
音楽出版社　年刊

前年９月末までに発売された映画、音楽、ＴＶ、実用、スポーツなど、全ジャンルの映像ソフト（DVD、VHS）の総カタログです。メーカーと価格の記載があり、購入したい場合に便利です。簡単な内容も書かれています。巻末にジャンル別の「作品タイトル索引」があります。

人物について調べる

映画関係の人物と言えば、俳優ですが、俳優に関してはいくつか人名事典があります。

『日本映画人名事典　女優編上下　男優編上下』
キネマ旬報社　1995年、1996年

1979年の**『日本映画俳優全集・男優編』**、1980年の**『日本映画俳優全集・女優編』**をベースに、これらに載らなかった俳優、その後にデビューした俳優を加えた、女優編2,035人、男優編1,952人という膨大な人数を収録した人名事典です。

プロフィール以外にも、人となりを表すエピソードや、俳優以外の活動も紹介されています。その他受賞歴や出演作品まで詳しく載っています。

ただし、どちらも出版年が古く、それ以降のデータは調べることができません。内容は簡単なプロフィールのみになりますが、芸能人名簿に**『日本タレント名鑑』『TVスター名鑑』**などがあります。

『外国映画人名事典　女優編　男優編』
キネマ旬報社　1995年、1997年

1974年の**『世界映画人名事典・男女優編』**、1987年の**『外国映画俳優全集・女優編』**、1988年**『外国映画俳優全集・男優編』**のほとんどについて収録し、さらにその後にデビューした俳優も追加された、映画創世記から現代までをカバーした事典です。また欧米以外にも、アジア、中東などの俳優も積極的に収録しています。前記の『日本映画人名事典』と同様、基本的なデータだけでなく、エピソードやゴシップも紹介されていて、親しみやすい内容になっていますが、顔写真が載っていない俳優もいます。

『クィンラン版世界映画俳優大事典』
デイヴィッド・クィンラン著　講談社　2002年

『Quinlan's Illustrated Directory of Film Stars』の第３版（1991年）と第５版（2000年）を合わせて、日本で１作でも公開作品のある俳優に限って日本語訳されたもので、映画初期から今日までをカバーしています。プロフィールは簡単ですが、すべての俳優に、出演作品リスト、顔写真がついているのが特徴です。

その他俳優以外の映画人名事典には、以下の図書もあります。

『日本映画人名事典　監督編』
キネマ旬報社　1997年
『映像メディア作家人名事典』
日外アソシエーツ　1991年
『20世紀の映画監督名鑑』
共同通信社　1999年

これらの人名事典のほか、有名映画俳優や監督について書かれている図書はたくさんあるので、通常の図書も参考になると思います。

(K.U.)

◇今回ご紹介したのは、図書館資料のほんの一部です。調べ物でわからないことがある場合は、お気軽にお尋ねください。